

# わが国のチーズ輸入をめぐる情勢

平成30年におけるわが国のチーズ輸入量は285,760トン（前年比4.8%増）で過去最高を更新し、4年連続で世界最大のチーズ輸入国となったと言われている。前年に続き第2位はロシア、第3位は米国になる見込みである。身近な食品となったチーズではあるが、とくに輸入量の95%以上を占めるナチュラルチーズの供給は、海外に依存する度合いをますます強めている。そこで、ナチュラルチーズを中心に、わが国のチーズ輸入をめぐる情勢を概観してみたい。

## 1. わが国は世界最大のチーズ輸入国

私たちの身近な食品であるチーズは、パスタなどの料理にかけたり、パンの生地等に練り込んだりして使用されている。また、お菓子、アイスクリーム、スープ等の様々な商品にチーズ味が登場するなど、チーズは幅広く使用されている。さらに最近では、いわゆる「家飲み」の増加によって、ワインに合うおつまみとしてチーズが選ばれる場面が増えている。

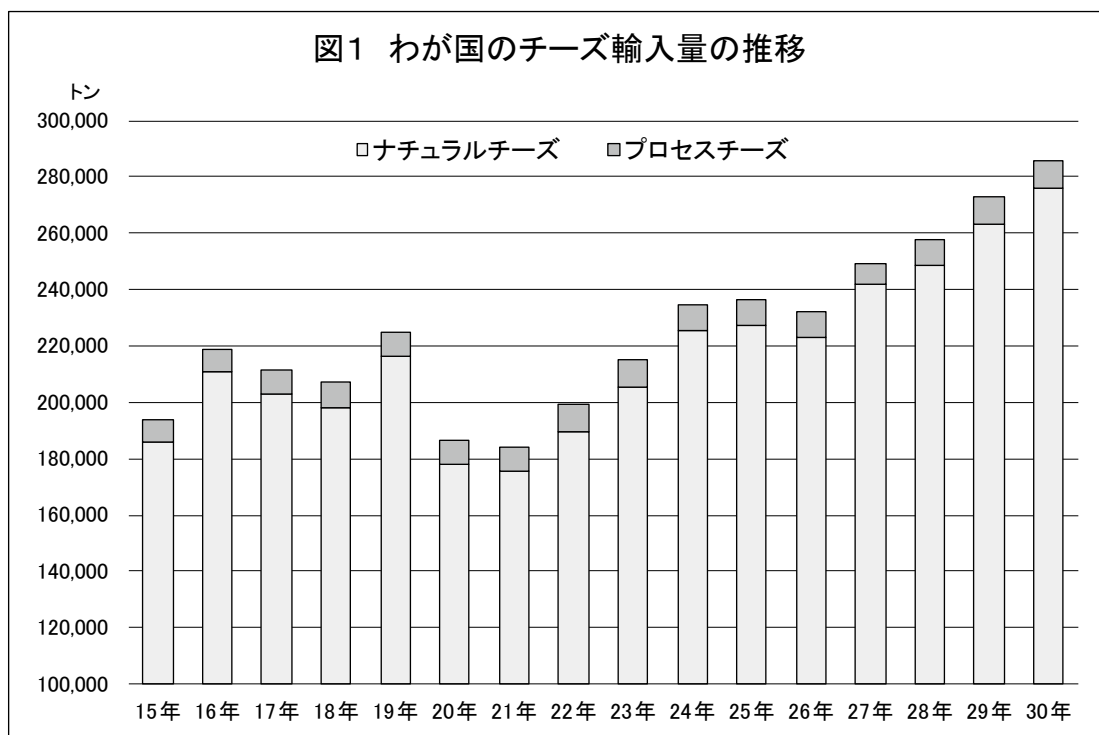
しかし、消費が拡大するチーズの供給は、海外に依存する度合いをますます強めている。農林水産省が作成する「チーズの需給表」によると、平成29年度のチーズ総消費量（ナチュラルチーズベース）に輸入量が占める割合は85.8%で、前年より1.5ポイント上昇している。同年度のナチュラルチーズの国内生産量が前年より3.8%減少したのに対して、輸入量が8.3%増加したことが大きく影響した。

図1は、わが国のチーズ輸入量の推移を示している。平成20年は、世界的な原油価格上昇の中で、中東やロシアなど原油輸出国での乳製品需要の増加が顕著であっ

た。また、経済発展が著しい中国国内において生乳が不足したため、中国が国際市場から脱脂粉乳を大量に購入したことによって、チーズの生産量が減少し、国際市場における貿易量が減少した。その結果、チーズ価格が高騰し、わが国のナチュラルチーズの輸入量が大きく減少したと言われている。

平成21年度以降における乳製品の国際需給は徐々に落ち着きを取り戻し、わが国のチーズ輸入量は増加傾向に転じた。このような状況の中で、全体の5%弱を占めるプロセスチーズの輸入量には、あまり大きな変化が見られなかったものの、平成28年以降は微増傾向に転じている。他方、ナチュラルチーズの輸入量は、長年にわたり増減を繰り返しながら増加してきたが、27年以降は4年連続で過去最高を更新し、30年には276,237トンとなった。

また、世界におけるチーズの貿易量を見ると、平成26年にロシアが欧米からの一部食品の輸入を禁止したため、チーズの輸入量を大きく減少させ、それまで順調に輸入を伸ばしていたわが国は、27年以降世界最大



資料:財務省「貿易統計」

のチーズ輸入国となった（USDA “World Markets and Trade”）。

## 2. チーズ輸入先の変化

わが国におけるチーズの輸入量の95%以上を占めるナチュラルチーズの輸入量は、長年にわたり、第1位をオーストラリアが占め、続いてニュージーランド、EU、米国の順であった。しかし、近年になって、この国・地域別の輸入量に変化がみられる。

平成22年以降増加傾向にあった米国からの輸入量は26年に急増した。米国国内の消費が伸び悩んでいたことから、米国政府が輸出促進事業として補助金を配布したことによって輸入が一時急増した。

また、EUにおいては、平成27年に「生乳クォータ制度」が廃止となり、生乳生産の上限枠が撤廃されたことによって、生乳が増産されチーズの生産量が増加した。さらに、世界最大のチーズの輸入国であったロシアが、平成26年にEUからの一部食品の輸入禁止措置を実施した影響もあり、日本向けの輸出が増大した。

EUからの輸入量は、その後も大幅に増加している。主要国別では、低単価の原料用チーズが中心のオランダ、デンマーク、ドイツ、アイルランドと、高単価の直接消費用チーズが中心のイタリア、フランスが順調な伸びを示している。

図2は、わが国のナチュラルチーズ輸入量の推移を、輸入先別に示している。近年では、EUからの輸入量が急激に増加し、ニュージーランドを凌駕し、豪州に肉薄する状況になっている。その結果、わが国のナチュラルチーズの輸入量は、オーストラリア、EU、ニュージーランド、米国の順に変わっている。なお、チーズ総量で

は、平成27年以降に急激な伸びをみせたEUが、平成5年以來、24年ぶりに最大の輸入先となった。

## 3. むすびにかえて

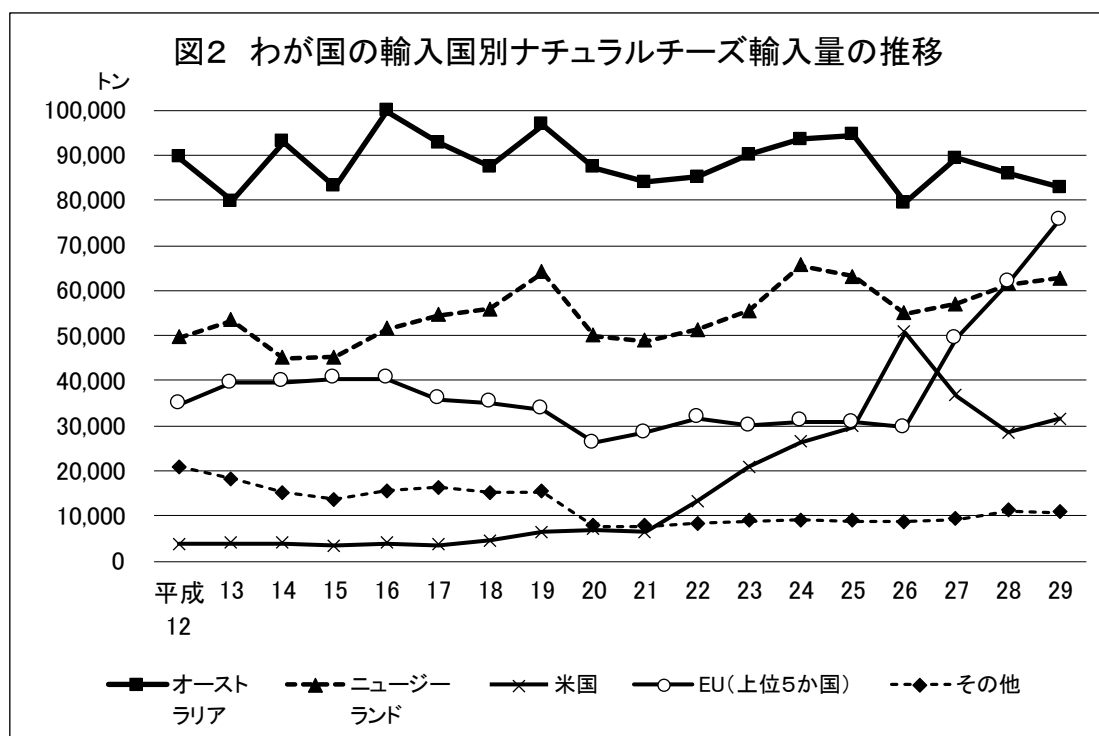
わが国におけるチーズの輸入については、

- ①チーズの風味が広く受け入れられるようになったこと
  - ②様々な食品に、隠し味や調味料として使用されるようになったこと
  - ③日EU・EPAの大枠合意によって、EU産チーズが注目され消費量の増加が予想されること
- 等の理由により、今後も増加傾向で推移するものと見られている。

わが国のナチュラルチーズ輸入量が、中東、ロシア、中国など乳製品輸入国における需給構造の変化に大きな影響を受け、平成20年に急減したことは既に述べたとおりである。しかし、拡大する国内のチーズ需要に応えるためには、主要輸出国での変化にも配慮する必要がある。

豪州では平成18年度、19年度に起こった大規模な干ばつにより、当時回復基調にあった乳牛飼養頭数は一気に減少し、生乳生産にも大きな打撃を与えた。また、同時期のニュージーランドでは、原油産出国や中国での乳製品需要の増加により、供給が追い付かない状況が続いた。そのような情勢により、わが国の両国からのチーズ輸入量は大きく減少した。

したがって、底が浅いと言われる世界の乳製品市場、つまり一部の国・地域における需給構造の変化によって国際価格が大きく変動する中、近年みられるチーズ輸入先の変化、とくに輸入先の分散は、チーズ国内市場の安定化にとって望ましい選択であったと言える。



資料:財務省「貿易統計」